

# NEWS LETTER

Vol. 1

## 子ども療養支援士の専門分野の確立

子ども療養支援協会会長・大阪府立母子保健総合医療センター総長 藤村 正哲

医療はストレスの多い世界です。しかし痛み傷ついた"こども"には、病院以外に選択の余地がありません。医療への受診は、"こども"にとって強制されたストレスへの暴露と映るでしょう。家族との分離は"こども"にとってそれまで経験したことのない暴力と感じられるかも知れません。

そのような医療の場を変革する動きは半世紀程前に本格化してきました。それを語る代表的な資料は、The Welfare of Children in Hospital-1958-ブラッドレポート(英国)や Charter for Children in Hospital-1988-(European Association for Children in Hospital)として知られて来ました。

"こども"の世界を理解し、"こども"のように感じるためには、必要な訓練を受けなければなりません。それによって医療者は"こども"の信頼を得るために努める必要があります。過去半世紀余にわたって蓄積されてきた、"こども"を理解するための理論と実践は、標準化された技術として確立してきました。その例として Child Life Specialist や Hospital Play Specialist の誕生と活躍が挙げられます。独力で海外で研修してきた数十名のパイオニアの方々が、今日本で活躍されています。

このような専門家の知識、技能の重要性を認識し、日本においてしっかりと標準化された訓練を受けた専門家を育成すること、その養成制度の整備を求める声が患者家族や医療関係者の間に高まり、それを受けて 2010 年 12 月にこの「子ども療養支援協会」が設立され、2011 年 4 月から第一期生の養成が始まったわけです。

大人同士がそうであるように、"こども"にも一人の人格として敬意を払い、その小さな声に耳を傾け、彼/彼女が感じるように感じ、その主張を理解できることが、私たちの生活の一部であって欲しいものです。育ちつつある"こども"の心がそこで体得した人間関係は、大人になる頃には大切な資産として育っているでしょう。私たちはこれから手を携えて、"こども"のために何ができるかを考え、医療者が支配する場でなく、"こども"が主権者として存在する医療の場を創り上げるために努力したいと願っています。



2010 年 12 月 4 日

子ども療養支援協会設立総会(於:順天堂大学)

中央:厚生労働省 森岡課長補佐をお迎えて

## 子ども療養支援士の研修が始まりました

2011年初年度の研修生4名を迎え、4月11日(月)に順天堂大学の会議室にて開講式を行いました。藤村会長の挨拶で始まり、藤井あけみ・後藤真知子副会長の挨拶と続きました。会長、副会長のあたたかな歓迎のことばに4名の研修生は少し緊張しながらも希望と熱意に満ち溢れた表情でした。ここでは両副会長より研修生に向けた挨拶文をご紹介します。

### 教育委員長よりご挨拶

北海道大学病院・助教・腫瘍センター・緩和ケアチーム  
チャイルド・ライフ・スペシャリスト 藤井 あけみ

この度は、子ども療養支援士認定コースへのご入学おめでとうございます。栄えある第一期生として皆様をお迎えできることを、大変うれしく、また有り難く思っております。

今から約六十年前、アメリカのオハイオ州クリーブランドにおいて、エマ・ブランクという人がチャイルド・ライフの活動を開始しました。私は彼女の著書、「Working with children in Hospitals」を読んで、次の言葉を皆様にもお伝えしたいと思いました。

一つ目はemotional needs、二つ目はfeelings、三つ目はchild's advocateです。それらを私なりにまとめて申し上げますと、「子どもの気持ちに寄り添って、いついかなる時も子どもの味方であってほしい」となります。どうぞたくさん勉強して、たくさんディスカッションして、たまには失敗もして、たくさん笑って、ちょっぴり泣いて、素敵な子ども療養支援士になってくださいね。

前期は諸事情で残念ながら皆様にお目にかかれませんが、後期の講義でお会いできることを今から楽しみにしております。どうぞお身体に気をつけて、無理をなさらない程度にがんばってください。

これを持ちまして開講にあたり、お祝いの言葉をさせていただきます。

### 教育副委員長よりご挨拶

大阪府立母子保健総合医療センター  
ホスピタルプレイス 後藤 真知子

私がイギリスで8年間生活し、2006年に日本に帰ってきてから、母子センターでHP士として仕事をさせてもらいながら「この職種を日本で養成できると良いな」と思い続けてきました。2011年4月11日の今日、思いを同じくする人々、応援して下さいた人々とともに待ちに待った日がやってきました。

ひとつ事を始めるというのは、大変なことで始まるまでには困難なこと、解決すべき問題がいろいろ起こりますね。日本中を揺るがしている東日本大震災は大きな不安です。家庭

でも、仕事場でも、様々に不安や心配事が起こる中、今日のこの時を迎えられたことを本当に嬉しく思い、胸がいっぱいになります。

1999年から2000年の事ですが、私をはじめこの職種を目の当たりにした頃の事を昨日の事のように覚えています。「あなた、やってみたら」と言って下さった、元HPSETのパメラ・バーンス先生は、2005年来日して「日本の病院の子ども達の将来」というセミナーを3日間行って頂きましたが、その最期の言葉として「この職種は、病気の子どもに質の高い医療サービスを実施する上で、無くては困る、絶対不可欠のものだと強く思います」と言われました。

私は、母子センターで一緒に処置や治療に当たった医師が病院を退職されるときに、アンケートをお願いしていますが、ある医師は「HP士が患者の不安のケアをしてくれるので、医師や看護師は、医療に集中できる」と言われています。また、母子センターでは、心理士、保育士、HP士は仕事の分担が出来上がりつつあります。「病気にまでなってしまった『こころ』の治療を心理士が、日常生活の援助や生活の中の遊びを保育士さんが主に担当して下さいます。HP士(子ども療養支援士)の仕事は、医療者の氏名、医療の意味や目的を良く理解したうえで、子どもにとっては異常な空間である病院であっても、子どもたちの不安や恐怖を軽減し、その子らしく意欲的に人生に取り組めるように援助することだと思います。子どもの人生にとっては、予防的な仕事です。

本日私が皆様に一番お願いしたい事は、日本中の子どもたちが、より幸せに意欲的に生活できるように、日本全体を視野に入れてまずは1病棟に1人の子ども療養支援士を配置するには3000人の子ども療養支援士が必要なので、できるだけ早くそれを達成するという大きな目標を掲げてそれを実現するにはどうすれば良いか、自分の利益のためではなく、日本の子どもたちの将来のために一緒に頑張っていく仲間になって欲しいということです。そのために、色々な角度からこの職種について考えながらトレーニングに打ち込んで頂き、力のある子ども療養支援士になって頂きたいと思います。

教育委員一同、心を込めて講義、実習指導をさせていただきます。わかりにくいこと、納得できないことはたくさんあると思いますが、どんどん質問して下さい。それが認定コースのレベルアップに繋がると思います。どうぞ宜しくお願い致します。



諮問委員である順天堂小児科清水教授を迎えての開講式の様子

**療養支援士実習生の方**

実習生たちは4月の2週間の講義を終え、5月より実習が始まりました。10月から後期の講義・実習が始まっているところです。そこで、前半のコースを終えた実習生の皆様の感想をここでご紹介したいと思います。

＜順天堂医院＞

**前期の実習を終えて**

伊藤 智美

期待と不安で胸がいっぱいになりながら、初めて順天堂医院の小児病棟に立ったあの日から3ヶ月が経ってしまいました。過ぎてしまえばあっという間ですが、実習記録を片手に振り返ってみると本当に学びの多い3ヶ月間であったと思います。病気であることを忘れてしまうくらい力強く遊ぶ子どもの姿からは、子どもの持つエネルギーの豊かさを肌で感じる事ができました。退院する際にお母さんから感謝の言葉をかけて頂いた時には、微力ながらも自分が役に立っていることをとても嬉しく思うと同時に、子ども療養支援士の仕事のやり甲斐を強く感じる事が出来ました。また、初めて子どもの死というものを体験しました。今まで遠い存在であった子どもの死を初めて身近に感じ、医療現場の厳しい現実を痛感する事もありました。実習で得られる学びの多くは子どもたちから教わったものです。子ども療養支援士として活動していくためには子どもの視点に立つ、という姿勢が求められます。子どもの視点に立つためにはまず、子どもと視線を同じくし、子どもの声をよく聞くことから始まるということも、実習中に子どもたちから教わった大切な学びの一つです。

プレイルームで10歳の女の子と9歳の女の子と遊んでいた時のことです。医師が血液検査の結果を子どもたちに渡しに来てくれました。しかし、結果が渡されたのは一人の女の子の分だけでした。医師に聞いてみたところ、もう一人の女の子の分は既にお母さんに渡してあるということでした。医師が去った後、検査の結果が直接渡されなかった女の子は頭を抱えて小さな声で「私に渡してよ…」と呟きました。血液検査の結果は、治療の結果を示すものであると同時に外泊の可否を決める指標となるため、子どもたちにとってとても重要な情報です。治療の結果や外泊の可否を一番知りたいと思っているのは、普段から辛い治療を頑張っている子ども本人だと思います。とても些細な出来事ですが、子どもたちはこうした何気ない医療スタッフの言動をとてもよく見ていて、その様子から自分のことを主体性のある個人として見ているかどうかを敏感に感じ取っていることを学ぶことが出来ました。私自身、この女の子の「私に渡してよ…」という言葉を書くことがなかったら、この

ような子どもの思いに気づくことが出来なかったと思います。

最後になりましたが、私がこうして子ども療養支援士の前期の実習を無事に終えることが出来たのは、子ども療養支援協会の方々、順天堂医院小児科スタッフの方々、CLS 早田さん、私を受け入れてくれた病棟の子どもたちやご家族…たくさんの方の支えがあつてのことです。自分を支えてくれる方々への感謝の気持ちを忘れずに、後期の講義・実習も頑張りたいと思います。



**子ども療養支援士臨床実習**

～前半を振り返って～

梶野 裕子

認定コース前期の講義に続いてスタートした臨床実習も3ヶ月が過ぎました。私の実習先の順天堂医院では、10A病棟(小児外科)と10B病棟(小児病棟)でCLSの早田さんが遊びの支援や子どもと家族の心理社会的な支援を行っています。保育士がいないため、主にプレイルームの安全管理や運営、病室での遊びの支援が日常業務になります。プレイルームには毎日、手術や検査前後、入院や退院日など様々な状況のお子さんが、医療器具をつけ制限ある生活を強いられながらも笑顔でやってきては、納得いくまで遊び、またお部屋に戻っていきます。病棟という非日常の生活空間の中で、プレイルームでは安心して遊ぶ、安心して遊んでくれる人が居ると子ども達が感じ取っているのがよくわかります。そして、遊びを通して子ども達が感情を表出するケースによく出会います。おままごとに食べられないものが出てきたり、お絵かきで食べたいものを書いたり、夢中で遊びの中で表現します。感じているストレスや感情を、遊びの中で吐き出しコーピングしていく力を子ども達はもっていて、入院や病気、治療によるストレスの積み重ねを、このように日ごろの遊びで解消していけると自分自身で次へ向かう準備ができています。実習で関わった子ども達との関係は、以前、看護師として接してきた時とは明らかに違い、病院の中でも子ども本来の姿を見せてくれる環境がここにはあります。日常の遊びを通して子どもの力を信じ、支えていく専門家が小児医療には必要だと改めて実感しました。また、月に一度「プレイルームランチ」といって、プレイルームに来られる子ども達と一緒に昼食を食べる日があり、その午前中は自分のランチョンマットを作成します。ランチョンマットは季

節感のあるテーマで、7・8月は実習生が担当し、海やカキ氷のマットを作成しました。おにぎりやウインナーなどの特別メニューで、遠足気分ランチも進みます。お友達とお話する機会にもなり、「私も〇〇～」と入院での経験など会話が飛び交います。朝昼夜、病室で食べる子ども達にとってはどんなに楽しいことでしょう。こうして、同じ経験をする子ども同士の交流の中で、自分だけではないという思いや仲間意識をもつことにより、病気を乗り越えようとするエネルギーも沸いてくるのではないのでしょうか。

こうして遊びや日常の関わりを通して得られる情報は、子どもの目線に立って聴くことのできる存在だからこそ得られる真の反応・言動で、チーム医療には欠かせない情報です。順天堂では、週一度開かれる「児童精神カンファレンス」で情報共有され、小児科医、児童精神医、小児看護専門看護師、心理士、CLSにより個々のケースに合わせた心理社会的支援が話し合われます。その内容が治療計画や看護計画にも反映され、まさに小児医療に必要なチーム医療体制だと感じています。

前期の実習ではその他、入院生活や手術や治療等のプレパレーション、処置後のメディカルプレイ、付き添うご家族やさきょうたい支援、七夕の会や夏祭り等病棟行事の企画・運営、また、月1回行われる「わくわく広場」での育児支援等にも参加させて頂きました。医療現場における子ども達の成長発達を支援していく子ども療養支援士の役割は多岐にわたると感じていますが、後半の実習では更に、実践できるよう技術を身につけていきたいと思っています。



＜大阪府立母子保健総合医療センター＞

コース前期を終えて

喜納 好香

「喜納好香といいます。出身は沖縄です。前職は看護師です。よろしくお願ひします。」

振り返ってみると、4月のぎこちない自己紹介からいつの間にか5ヶ月が過ぎていました。私の実習先である大阪府立母子保健総合医療センターは、大阪府内全域を対象としている第3次医療圏の病院ですが、関西圏だけでなく日本中から治療をうけにくる子どもたちがいます。その子どもたちや家族を支える職種の一つとしてホスピタル・プレイ士(院内名称)が

います。拠点となる2病棟を軸に、関わりが必要と思われる子どもがいるとの連絡があれば、病院中何処へでも笑顔で飛んで行くホスピタル・プレイ士の働きを間近で見せてもらいながら、子ども療養支援士としてのプロフェッショナルな関わりを日々学んでいることに、とても感謝しています。

前期の実習では、主に、ホスピタル・プレイ士に同行してプレパレーションやデストラクションの見学を行ったり、子どもたちの個別や集団での遊び、また、病院内の他職種の働きを知るために各外来や病棟、放射線科、院内学級などの見学を行ないながら子ども療養支援士についての学びを深めて行きました。様々な場面のなかで、私が考えることが多かったことは、『子どもや家族の気持ちを考えること』についてです。前職が看護師であったため、治療や検査、入院することについて、子どもやその家族が感じる思いは多少学んできたつもりでした。しかし、子ども療養支援士として改めて子どもや家族の気持ちを学び、一緒に遊んだり、ホスピタル・プレイ士が行なう検査や手術の前のプレパレーションの場面で子どもや家族がポロっと口にする本音を聞いたときに、今までの自分の知識や考えが浅はかで、子どもやその家族に対しての配慮が不足していたことに気がつきました。4月の講義の時に、『子どもの視点に立つ』ことを教わりましたが、実習が始まってからより一層、言葉の本当の意味を考え、その言葉通りに実行することの難しさと大切さを感じています。

認定コースが始まった4月から、同じ志を持った仲間や、「いつかはこうなりたい」と思う憧れのホスピタル・プレイ・スペシャリストやチャイルド・ライフ・スペシャリストの先生方、色々なことを教えてくれる子どもたちなど、たくさんのお会いに恵まれている毎日を過ごしてきました。約半年経過した今、自分がどのような子ども療養支援士になりたいか少しずつ具体的に考えることができてきました。後期の実習でも、いろいろなものを見たり聞いたりして学んでいき、自分の目指す子ども療養支援士像を具体的にイメージしながら、それに向かって自分らしく、楽しく精一杯学んで行こうと考えます。

前期講義・実習を通して学んだこと

オ木 みどり

研修生の合格の知らせを受け取ってから、4月に講義が始まるまでの間、これから始まる研修や講義に期待もあつつ、どんな方々と一緒に学ぶことになるのか、合格の通知を頂いたけれど、医療現場の実態を知らない私についていくことが出来るのだろうかと不安もありました。講義の教室で一緒に1年間研修を受ける3名の研修生と初めて会い、2週間講義と一緒に受ける中で、それぞれのこれまでのバックグラウンドを話したり、どのような思いを持ってこの研修生に応募したのかなど

を知るうちに、一緒に学んでいく仲間の存在に励まされました。東京での2週間の講義期間を終える頃には、一緒にがんばれる仲間がいる事を心強く感じていました。

そして5月、ついに大阪府立母子保健総合医療センターでの実習が始まりました。耳に飛び込んでくる医療用語が薬の名前なのか、治療のことなのか、病名なのか理解できない事が多く、聞いたり、調べたりとまずその用語の意味を理解していく事で必死でした。また、医療機器から聞こえる機械音がこんなにも多い事に驚き、病院にいるという事を実感させられました。そんな中でもホスピタル・プレイ士(HPS、CLSを総称して母子センターでは病院内名称としてこう呼んでいます)と入院・治療を受けている子どもたちとの関わりを見学させて頂く中で、プレパレーションやディストラクションによって安心して治療を受ける子どもの姿や遊びの中でほんとうに子どもが楽しんで笑ったり、必死になって遊んでいる姿を目の当たりにして、医療現場であってもこんなに子どもたちが明るい表情になれるのだと実感する日々でした。また、看護師や医師、病棟保育士との連携が不可欠で、子どもと関わりを持つ上でお互いにどのような思いを持っているのか、ホスピタル・プレイ士としてどのような関わりが必要と考えているかなど共通認識をもって進めていく事が何より大切である事を感じました。他職種とコミュニケーションをとって自分には何が出来るのか、どう動かなければならないのかを判断する力をつけなければいけないと考えました。

実習も3ヶ月目に入ると、その子どもの病状や様子を踏まえてどのような関わりが必要なのかなどを考え、実際に子どもたちと遊んだり、話をしたりしています。実際に子どもたちに関わってみると、どこまで話をしてもよいのか(病気の事を含め)迷ったり、ことば遣いに迷ったり、この遊びを本当に楽しめているかなど不安になったりする事も増えました。しかし、会話の中でいるような思いを話してくれたり、継続的に遊ぶ中で子どもの姿が変わってくる事も実感して、「また遊んで」と言ってくれたり、退院時に「ありがとう」と言ってくれたりする事が本当にうれしいです。

子ども療養支援士として入院・治療を受けている子どもたちが楽しいと思える時間を少しでも多く過ごせるよう、後期の講義、実習の中でももっとも自分中での理解を深め、取り組んでいきたいと思っています。



## 第1回総会のご報告

2011年6月18日(土)に順天堂大学内にて子ども療養支援協会第2回総会・記念行事を開催しました。約90名の方がご参加下さり、また子ども達の生の声を聞くことができる貴重な会となりました。

特別講演では、東京女子医科大学母子総合医療センター 名誉教授 仁志田博司先生による「何故子どもの権利を守らなければならないか」のお話を賜わり、改めて子どもの生きる力や共生することの大切さを学びました。また、パネルディスカッションでは、平原 興弁護士による「子どもと医療～子ども療養支援士の使命と展望～」、CLSやHPSのケアを受けたことのある11歳のYさん、7歳の女兒のお母様にご口演頂きました。教育委員からは、桑原和代さんが「子どもの視点～プレパレーション～」、石田智美さんが「遊びの力～治癒的遊びと大人の役割」、田中恭子先生が「医療の中の子どもを支えるエッセンス～よりよい方法を目指して～」と題して日々の活動をご紹介しました。

ここでは、ご口演の一部をご紹介します。

### みなさんCLSって知っていますか？

Yさん 11歳

私は、入院するまでは知りませんでした。私の入院している病院には、CLSの方がいて、一日一日がとても楽しかったです。手術の前に、ICUの見学にいっしょに行ってもらった事もありました。ICUの看護婦さんやCLSの方が手術後の説明やICUの様子を教えてくださいました。その時は、自分が手術へのきょうふなどがありましたが、ICUに行くことによって、少し安心しました。

また、入院中に一緒に遊んでもらう事もありました。トランプやカードゲーム、ボードゲームなど、様々な遊びをいつもしてくれました。遊ぶことによって入院中の心配や不安も忘れる事ができ、楽しい時間を過ごす事が出来ました。また、イベントや季節ごとに、工作をすることもありました。秋には、ハロウィンのお面やバッグ、冬にはクリスマスツリーなどを作ってとても楽しかったです。また、季節の工作をすることによって、病院内にいても、季節を感じる事ができよかったです。

CLSの方のお仕事を実際に見て、私も将来同じ仕事につきたいと思いました。もし私も子ども療養支援士になれたら、入院している子ども達の手伝いをしたり、一緒に遊んだりしたりして、人の役にたきたいです。



子ども療養支援士実習生の方との

触れ合いが育てる子どもの未来

8歳 女兒 母

現在8歳になる私の娘は、4歳の時以来病院への入院を繰り返しており、そのたびに療養支援士実習生にお世話になっています。娘は入院生活で目の当たりにするお医者さんや看護師さんの仕事に興味を持ち、実習生との病院ごっこ遊びを通じてその興味は深まりました。点滴の道具を始めとして、医療器具を次々と工作するようになっていきます。娘にとって実習生との遊びは純粋に楽しい経験であり、興味のあることに没頭できる時間です。

そもそも子どもは一日の大半を遊んで過ごすことが自然であり、遊びは心身の健康に不可欠なものです。病室で管理された生活をし、時につらい検査や治療を決められたままに全て受けなければいけない日々が続く子どもにとって、遊びは入院生活のストレスを軽減する大きな意味もあります。しかし入院中は、子どもが充実した遊びの時間を持つことは難しいのです。同年代の遊び相手に会えるとは限らず、お友達に会えたとしても子ども達それぞれが治療のために行動を制限されていることが多いので、子ども自身で自由に遊びを深めていくことができません。

従って、子どもたちそれぞれの治療上、生活上のニーズを理解している実習生が、遊びのパートナーとして、また子ども達同士の遊びのサポーターとして助けて下さることはとても大きな意味があります。娘が遊びを楽しみ笑顔を見せてくれると、私も嬉しい気持ちになり、親子ともども入院生活を前向きに考えていこうという気持ちの転換にもつながりました。

娘は「お医者さんになりたい。だって人を助ける仕事だから」と言うようになりました。自分が受ける治療をまねるお医者さんごっこ遊びを通じて、以前は治療を怖がるだけであったのが、その必要性を理解するようになりました。そして将来は自分が医師になりたいという思いを抱くまでになりました。実習生との触れ合いによって、子どもの新しい可能性も育まれています。



会員の方からの声

総会にご参加くださったからの寄稿です。

あっ！私と同じ思いの人がいる！

この感激は、子ども療養支援士協会発足の記事(2010年12月13日 朝日新聞)を見た時でした。

私には5歳の娘がいます。娘が4歳だった5回目の入院の時、ある出来事が起こりました。朝、娘の泣き叫ぶ声が聞こえて病室に入ると、恐怖で暴れる娘を押さえて看護師が強引に鼻に管を入れて痰を吸引しようとしていました。私はとっさに大声で、「何をしていますのですか！説明を受けていないですすよ」と言いました。看護師は「必要な医療行為はその都度行うようになっています」とだけ。

この事が娘のトラウマになり、その後、かかりつけの小児科医や看護師が鼻にさわるだけでも娘は暴れてしまい、結局トラウマを払拭するのに1年かかりました。娘の不安や恐怖を和らげるように努めていた私も看病が長引くにつれ疲弊していきました。医師や看護師でもない第三者的な立場で子どもや親の心のケアをしてくれる人、子どもを一人の人間として医療行為を説明してくれる人が欲しい！と願っていた矢先に、あの記事を見つけたのです。

早速HPで情報を集め総会に参加しました。治療をする上で子どもに語りかける大切さを訴えていた仁志田先生の話や子ども療養支援士の活動の話はとても興味深く、子ども療養支援士の取組みをもっと広めたいと強く思いました。私に何かできることはないかと考え、まず娘がいつも泣き叫ぶ点滴・採血・吸引などをわかりやすく説明できる絵本を作ろうと思いました。しかも忙しい看護師さんが使いやすいサイズの物を只今、絵本作家と創作中です。私がすぐに子ども療養支援士になることは難しいですが、たくさんの人のアイデアや力を集めて少しでも病気の子どもや親の不安を和らげる手助けになりたいと思っています。

今後も子ども療養支援士協会の取組みを応援しています。



**CLS・HPS（教育委員）からの活動報告**

**2つの貴重な経験とCLSとしての可能性**

大阪府立母子保健総合医療センター発達小児科  
ホスピタルプレイ室ホスピタルプレイ士  
伊藤麻衣 CLS

普段は、主に外科病棟・内科病棟にて入院している子どもたちやご家族とかかわっています。手術や検査前のプレパレーション、処置や検査時のディストラクション、長期療養中の子どもたちへの発達段階にあわせたアクティビティやかかわりの提供、入院している中学生以上の子ども対象の青少年ルームの運営などを行っています。また、各種カンファレンスなどへの出席を含めて、他職種間の連携をとりながら活動しています。

さて、今回は私が参加した2つの貴重な活動について報告したいと思います。2011年3月11日、東北地方太平洋沖地震と福島原発事故が起きました。被害にあわれた方々へも、そしてそれを見守りしかない私たちにも、様々な現実と想いがつきつけられました。発生から半年以上たった今も、多くの子どもたちが様々な影響を受けているのです。

そんな中、5月5日に郡山で行われたキッズフェスタに参加しました。これは、原発事故の影響で思い切り外で遊べない子どもたちのため、屋内で毎年恒例の子ども祭りを行おうというものでした。私たちのグループは、クワニスドールやコマ作り、ビーズなどのクラフトを持参しました。結果は・・・大盛況！子どもたちは皆、一生懸命クラフトに集中し、うれしそうな笑顔で作ったクラフトをご家族や私たちにを見せてくれました。そんな子どもたちをどの親御さんもほっとしたようなやわらかな表情で見守られていたことがとても印象的でした。

さらに、8月1日から4日にかけて那須塩原にて行われた“にこにこキャンプ”に参加しました。ボーイスカウト、ガールスカウト、YMCAなどのキャンプのエキスパートが参加し、医師、看護師、CLS・HPS、心理士、栄養士など様々な職種の協働のもと実現しました。対象は福島県相馬市の小学生です。参加した子どもたちの多くは避難所での生活を経験し、おそらくはなんらかの形で別離や死別を経験しているだろうとのことでした。CLS・HPS、心理士で協働し、心のケアチームとして他のスタッフと連携しながら3泊4日子どもたちと一緒に過ごしました。子どもがどんな感情表出をしても「そばに寄り添う」こと。4日間を通してもっとも大切な役割であったと思っています。子どもたちは思いっきり笑って遊びまわる一方で、涙をみせたり、スキンシップを求めたり、落ち着きがなかったり、地震や津波のことを語り始めたりと様々でした。そして、いろいろな思い出を胸に、晴れ晴れとした笑顔と、スタッフとのお別れがさみしいあたた

かい涙いっぱい、子どもたちは帰っていきました。子どもたちを見送ったスタッフの表情も、まったく同じでした。出会えたこと、同じ時間を過ごせたことに、誰もが感謝とあたたかい想いを感じていたと思います。

これらの活動は今後も各団体が継続されていくことになっており、私もできる限り引き続き協力したいと考えています。CLS・HPS・子ども療養支援士。主に働く場所は病院ではありますが、きっとこれから様々な可能性があると思うのです。欧米では裁判所や地域センターなど、病院という現場以外の場所で働くCLSもいます。つまり、子どもがストレスを抱えうる場面において、他職種の人々と協働しながら、様々なアプローチ方法で心理社会的なかわり・サポートができるのではないのでしょうか。私自身これからも、初心と他職種のスタッフとの連携を大切に、この職種の様々な可能性を柔軟に楽しんでいきたいと思っています。そして、これからますます子どもやご家族への心のサポートがしっかりと日本の社会に浸透していくことを願っています。



郡山キッズフェスタにて（子どもの画いたイラスト）

～もとの日本にもどって、  
いろいろな人とこれからいろんな人とふれあいたいな～



のんびり遊ぼう にこにこキャンプにて

（子どもの心と身体の成育支援ネットワーク）  
外で思いっきり遊びました！

## 事務局からのお知らせ

### ● 年会費の納入のお願い

ご入会有難うございます。2011 年度会費未納の会員の方は下記口座までご入金の際、宜しくお願い申し上げます。  
振込先:みずほ銀行 本郷支店 「普通」2813671 子ども療養支援協会

### ● 今後の予定

子ども療養支援士養成プログラムの予定

開催日	内容	会場
11/26	後藤・伊藤によるマンスリーセッション	大阪
1/28	後藤・早田・伊藤・田中によるマンスリーセッション	大阪・東京
2/25	研修報告会	東京
3/18	修了・認定式	東京

2012 年 2 月 25 日(土)の研修報告会は、順天堂大学において 13 時開始を予定しており、会員の皆様のご参加をお願いしております。詳細は後日ご案内させていただきますので、是非お越し下さい。

### ● 2012 年度受講生募集について

募集要項は、2011 年 11 月中旬に協会ホームページ(<http://kodryoyo.umin.jp/>)上に掲載予定です。  
詳しい内容、手順はホームページをご覧ください。意欲ある受講生の皆様をお待ちしております。

### ● 厚生労働科学研究費補助金について

当協会の取り組みが平成 23 年度成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業「重症の慢性疾患児の在宅と病棟での療養・療育環境の充実に関する研究」(研究代表者:田村正徳、分担研究者:田中恭子他)に採択されました。  
ニュースレターは当該研究の活動の一環として発行しています。

## 編集後記

予定を少し遅れましたが、協会ニュースレター創刊号を発行することができました。ご協力下さいました多くの方々に感謝申し上げます。また今年 3 月 11 日の大震災、そして原発の問題、心を痛めることが重くなりました。このような中で本協会として、今まさにこれからの世の中を担う子どもたちのためにできること、そんなことを常に心に留めながら一つ一つのステップを踏んでいきたいと感じております。

協会ニュースレターは年 2 回の発行予定しております。是非会員の皆様の多くの声をお聞きたいと思っております。皆様のご意見、お写真等をどしどしお寄せ下さい。お待ちしております。

子ども療養支援協会事務局 (事務局長 田中恭子)  
〒113-8421 東京都文京区本郷 2-1-1 小児科研究室内  
Tel : 03-3813-3111 / fax : 03-5800-0216  
e-mail : kodomoryoyoshien@yahoo.co.jp